

Steel 鉄の絶景 Landscape.

歓声を浴びる鉄
～神奈川～



今年10月、日本最大のビッグスタジアム、「横浜国際総合競技場」が落成する。明治維新以後、つねに日本の近代化と国際交流の先端を切り開いてきた都市、横浜がスポーツという世界共通のコミュニケーションに夢を託して今また次代に向けて一歩先を歩み始めた。

感動と興奮のビッグゲームに向けて

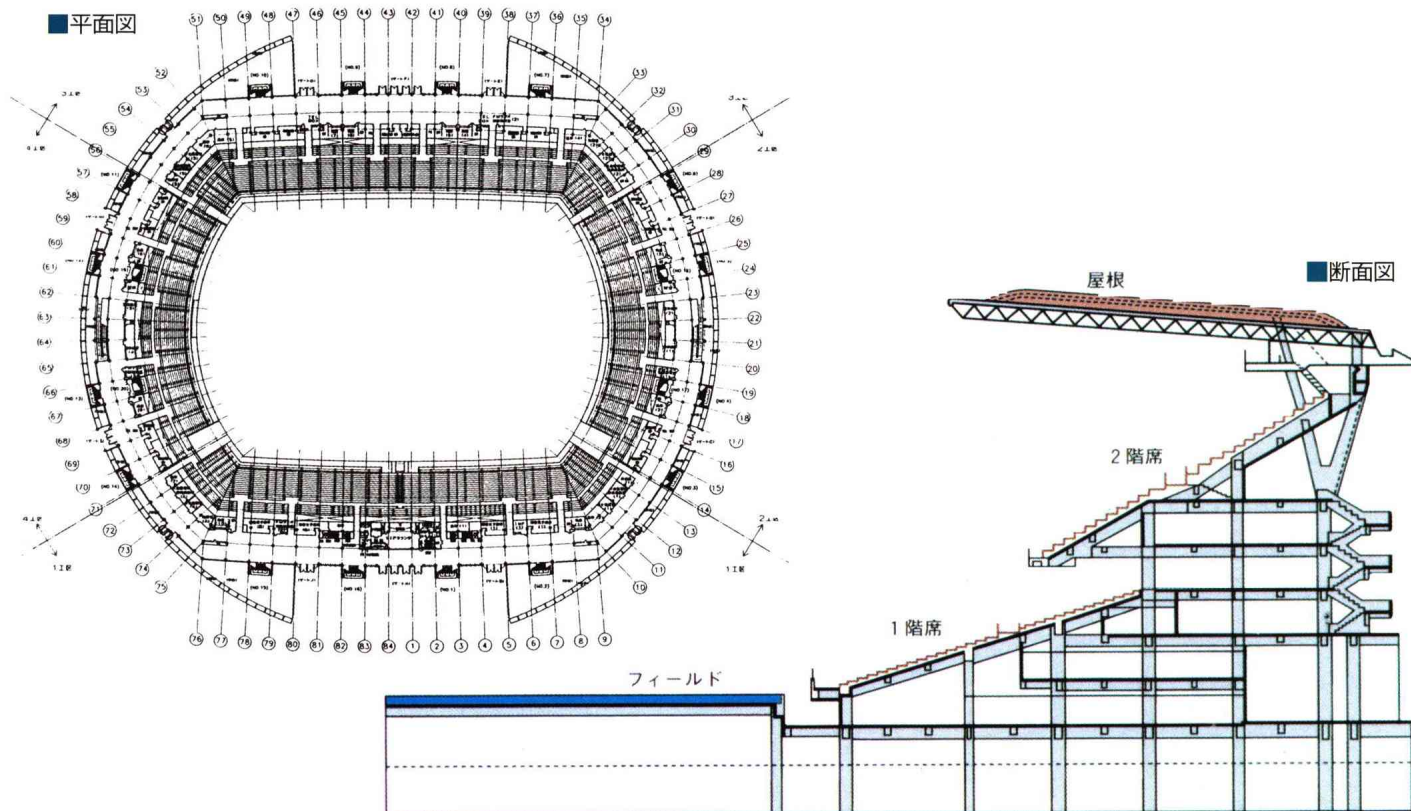
野球とサッカーを例に挙げるまでもなく、横浜市はスポーツに熱狂的な都市といえよう。その横浜市が平成10年の神奈川国体、また、2002年のワールドカップサッカーの開催候補地として、さらに大きな感動と興奮の中心地となろうとしている。

そして、文字どおりその情熱の坩堝となるのが、日本最大のスポーツスタジアム、「横浜国際総合競技場」だ。サッカーグラウンドを内包する400mトラック、9レーンのフィールドは、日本陸上連盟第一種の認定を受け、さらにワールドカップサッカー開催のために、国際サッカー連盟、FIFAの数々の規定をクリアして、この巨大

なスタジアムは今年10月の落成に向けて急ピッチで最後の仕上げにとりかかっている。

プレーのしやすさ、観戦のしやすさに主眼をおいて建設

収容人員70,000人、延床面積約166,000m²、高さ約52m、建築面積約64,000m²、という数字は、いくら巨大だ、日本最大だ、といってもたやすく想像できるものではない。このスタジアムは、そうした数字が示す大きさよりもプレーのしやすさ、観戦のしやすさに主眼をおいて建設されていることが特長である。陸上競技場としては、わが国初の2層式観客席を採用したため、後方の客



席がいちだんとフィールドに近くなり、前と後ろの差がせばまった。最前列はフィールドと同じ高さで、いっそう迫力のあるプレーが間近で観戦できる。

そして、このスタジアムの最大の特長となるのが観客席の2/3を覆う鉄骨造の屋根である。サッカーグラウンドに張られた天然の芝のために、ドーム型ではなく開放型の屋根が採用されたのだが、そのゆるやかな曲線は晴天時の防眩や雨天時の快適な観戦に充分配慮されている。素材はステンレス制振鋼板で、耐候性があり、雨音も響かない。数字の話に戻ってしまいが、屋根材の総重量はなんと1,300t。これを約5,000tの立体トラス鉄骨が支えている。つまり、合計で6,300tの巨大屋根なのだ。実際に観客席に立つと、プレーヤーと観客の一体感をコンセプトに建設されたというとおり、他の野球場などよりもフィールドがとて近く感じられる。さらに、いたるところに配置されたTV放送用のカメラアングルや大型マルチビジョンなど、報道との一体化もはかられている。

スタジアムと周辺環境との調和

スタジアムのすぐ横を鶴見川が流れる。このあたりは以前から多目的遊水地として整備が進められており、スタジアムの建設もその一環として進められてきた。

フィールドと観客席は2階よりも上に建てられ、1階部分は空洞になっているのだが、万一、大雨などによって鶴見川が氾濫した場合、その水がここに溜められる。つまりスタジアム全体が巨大な水上施設となるのである。また、フィールドの天然芝の散水には、鉄骨屋根に降った雨を貯溜して利用し、トイレの洗浄も雨水と近くの下水处理場から送水されてくる下水処理水を利用する。電力も環境事業局都築工場の排熱を利用、さまざまな技術が導入されている。

選手と観客が一体化するだけでなく、まさに自然と調和したスタジアムなのだ。

そして来春、いよいよフィールドに歓声が響く。

横浜国際総合競技場のこけら落としとなるのは、来年3月に予定されている第4回AFCダイナスティカップである。極東アジア各国が繰り広げるサッカーの激しい戦いと熱い応援は、春一番よりも早くこの銀傘に吹きつけるだろう。スポーツの情熱を運ぶ風は、今までも、そしてこれからも、必ずハマから渡ってくる。

取材協力：横浜国際総合競技場建設工事調整事務局
写真提供：横浜市緑政局横浜総合運動公園整備室